

Title	指定辞「トイウ」の比喩的な用法について：コンピュータ文との対照からみた
Author(s)	大田垣, 仁
Citation	語文. 2016, 105, p. 80-97
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/70975">https://hdl.handle.net/11094/70975</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 指定辞「トイウ」の比喩的な用法について

—コピュラ文との対照からみた—

大 田 垣 仁

## 1. はじめに

日本語には「人生という旅」のような、「N1 トイウ N2」型の隠喩表現がある（N は名詞）。これは本来、指定辞「トイウ」がカテゴリーの上下関係（包摂関係、N1⊂N2）をあらわす機能をもっており（金水 1986）、N1 が N2 がつくるカテゴリーの本来の要素でないときに、比喩的な用法が生じるものと考えられる。この比喩的な「トイウ」の用法は、いわゆる概念メタファー（Lakoff and Johnson 1980, Lakoff 1987）を構成するコピュラ文に対応している（e.g. 人生は旅である）。三上（1953）、坂原（1990）、西山（2003）などの先行研究が指摘するように、日本語のコピュラ文にはいくつかの類型がある。本稿では、CiNii Books<sup>(1)</sup>から抽出した「N1 トイウ N2」型の書名を手がかりに、まず、「N1 トイウ N2」の比喩的な用法を整理する。つぎに、コピュラ文の類型をメンタル・スペース理論（Fauconnier 1985, 1997）の観点から整理したうえで、この用法がコピュラ文のどの類型に対応し、どのような原理で比喩的な解釈が成立するのかを分析する。結論として、トイウの比喩的な用法が、メタファー用法とその他の用法にわかれることをのべる。前者は、本来、N1 と N2 のあいだに生じるタクソノミーの関係をしめすトイウが、類似性にもとづく N1 と N2 の語用論なマッピングをもタクソノミーの関係にとりこむものである。後者は、N1 がもつフレームのなかから N2 があらわすカテゴリーの内包に合致する側面がトイウとの結合をきっかけとして想起されることによって生じるものである。

本稿の概要はつぎのとおりである。第2節で、CiNii Books から抽出した「N1 トイウ N2」型の表現について記述的な観察をおこなう。第3節で、本稿の分析の道具だてとして、メンタル・スペース理論（Fauconnier 1985, 1997）による名詞のとらえかたをのべる。また、この観点から日本語のコピュラ文の整理をおこなう。第4節で、第3節でしめた分析方法をもとに、第2節で提示した例を分析する。第5節はまとめである。

## 2. 言語現象の観察

CiNii Books から「N1 トイウ N2」を含むタイトルの書籍を抽出した。書籍のタイトルを「N1 トイウ N2」の形式に統一し集計したところ、重複したものをのぞくと、執筆時点（2015年8月）で2519のくみあわせがみつかった。さらに、N2にどのような名詞が使用されているかに注目し、5例以上使用されているものを列挙するとつぎのようになる（括弧内は例数）。ちなみに、全用例において、N1ではしばしば固有名が使用されるのに対し、N2は2例（「ヤヌス」「ヨーロッパ」）をのぞいて、普通名詞であった。

- (1) 生き方 (185:「生きかた」をふくむ)、仕事 (97)、幻想 (50)、病 (59:「病い」をふくむ)、思想 (41)、もの (40)、神話 (36)、選択 (33)、男 (32)、視点 (31)、国 (25)、時代 (23)、謎 (23)、人 (21)、物語 (20)、女 (17)、文化 (17)、人生 (15)、世界 (15)、経験 (14)、方法 (13)、問題 (13)、お仕事 (12)、希望 (12)、考え方 (12)、視座 (11)、メディア (10)、宇宙 (10)、怪物 (10)、奇跡 (10)、現象 (10)、言葉 (10)、職業 (10)、冒険 (10)、鏡 (9)、存在 (9)、夢 (9)、虚構 (8)、劇場 (8)、場所 (8)、戦略 (8)、病気 (8)、ところ (7)、概念 (7)、街 (7)、制度 (7)、戦場 (7)、暴力 (7)、迷宮 (7)、システム (6)、営み (6)、価値 (6)、観点 (6)、呪縛 (6)、商品 (6)、装置 (6)、挑戦 (6)、働き方 (6)、発想 (6)、舞台 (6)、癒し (6)、牢獄 (6)、イデオロギー (5)、レッスン (5)、悪夢 (5)、芸術 (5)、幻 (5)、財産 (5)、詩人 (5)、試練 (5)、字 (5)、自然 (5)、実験 (5)、場 (5)、生きもの (5)、贈り物 (5)、他人 (5)、地獄 (5)、不思議 (5)、武器 (5)、密室 (5)、力 (5)、毘 (5)

以上の例について、それぞれの例を「通常表現」「メタファー」「その他」にわけた。「通常表現」は、N1とN2がタクソノミーを形成しているもの。「メタファー」はN1とN2が類似性によって結合しているもの。「その他」は、N1とN2がタクソノミーでもメタファーでもない例である。「メタファー」と「その他」の用法を「通常表現」に対して「トイウの比喩的な用法」とよぶことにする。分類にあたっては、「N1 トイウ N2」という結合が、本来的なタクソノミーであるか、比喩的な拡張をもつものであるかを判断する必要がある。N1とN2が本来的なタクソノミーを形成するかどうかは、「N1はN2らしいN2だ」(e.g. 太郎は赤ん坊らしい赤ん坊だ)や「本当はN1はN2だ」(e.g. クジラは本当は哺乳類だ)といったテ

ストフレームによって判断することができる。前者は、N1 が N2 があらかずカテゴリーの中心的なメンバーであることをしめし、後者は N1 が N2 があらかずカテゴリーの周辺的なメンバーであることをしめす。また、トイウの比喩的な用法のなかで、N1 と N2 の結合がメタファーであるかどうかは、「N1 はまるで N2 のようだ」(e.g. 人生はまるで旅のようだ) というテストフレームで判断できる。これらのテストフレームをもとに N1 と N2 の関係を整理した。紙幅の都合で、特徴的な用法をもつもののみを表にしてしめすと [表 1] のようになる (表は論文末に掲載。「φ」は該当例がないもの)。以下では、[表 1] で整理した内容について N2 にくる名詞を手がかりに概観する。

## 2.1. 「通常表現」のみをもつみあわせ

まず、N1 と N2 がタクソノミー (N1 ⊂ N2) のみを形成している例についてのべる。

### 2.1.1. 「もの」

上位カテゴリーに「もの」という名詞をもつみあわせについて。「もの」という名詞は非常に抽象的で、「私というものは」「人生というものは」のように、元来抽象的なものをさらに一般化して素材としてとりだす定型表現の要素であると考えられる。したがって、「私はものだ」「人生はものだ」のようにコピュラ文のかたちパラフレーズすることができない。

### 2.1.2. 「人」

上位カテゴリーに「人」という名詞をもつみあわせについて。「人」という名詞は下位カテゴリーとして人名のみをとる。書籍のタイトルから例を抽出したためか、宗教家 (e.g. イエス、日蓮)、作家 (e.g. 漱石、太宰治)、政治家 (e.g. 市川房枝) といった職業の人物がみられた。この用法は、固有名詞を一般化して、素材としてとりだす用法であろう。

### 2.1.3. 「謎」

上位カテゴリーに「謎」という名詞をもつみあわせについて。「謎」には様々なものが考えられるが、「量子、自閉症、進化」のような自然科学の謎に位置するものと、「神、私、自己、身体、真理、社会、貨幣、資本主義、教育、コミュニケーション、遊び、日本人、インド」のようなひろく人文学、社会学に位置する謎

がみられた。「謎」という名詞は抽象的で、およそ「謎」とみとめうる様々な名詞を下位カテゴリーに位置づけることができる。名詞「謎」と、その下位に位置するN1が、「N1は謎だ」の形式にパラフレーズできることから、このくみあわせにおけるN1を表1では通常表現にまとめた。しかし、通常表現として、「量子は謎らしい謎だ」がいえると同時に、比喩表現として、「量子はまるで謎のようだ」ともいえることから、名詞「謎」がつくるカテゴリーは、通常表現とメタファーの境界のあいまいさをしめすものといえるだろう（表1では境界の曖昧さをしめすために通常表現とメタファーの境界を点線でしめた）。

## 2.2. 「メタファー」のみをもつくみあわせ

つぎに、N1とN2がメタファーのみによって結合している例についてべる。

### 2.2.1. 「罨」

上位カテゴリーに「罨」という名詞をもつくみあわせについて。〈鳥獣を生け捕りにするためのしかけ〉が「罨」の本来の意味である。一方、「N1という罨」というくみあわせにおけるN1は、「JAL、母親の役割、幸福、ドル崩壊、豊かさ」であり、N2はメタファーによる意味拡張によって〈人をおとしいれる計略や錯覚〉といった意味で使用されている。

### 2.2.2. 「神話」

「神話」という名詞には「母性本能、統一理論、男らしさ、国際連合、合理的市場、学歴社会、家族、キリスト教、輪廻」がN1としてむすびつく。この用法は、〈理念や固定観念〉という類似点にもとづいてN1と「神話」をむすびつけるメタファーの例であり、当該概念の社会的な受け止められ方を否定する点で、後述する「幻想」の例に用法が似ている。また、「遺伝子」の例もメタファーの例と考えられるが、この例は〈時をこえてつたえられていく〉という類似点がメタファーの成立に関わっている点が異なっている。さらに、「会津、レコード・ジャケット、レオナルド・ダ・ヴィンチ、スターリン」の例は、本来的には「神話」の一種としては解釈しにくい名詞だが、当該の名詞が、その名詞がもつフレームにふくまれる神話とみなしうる事象をひきだすキーワードとして使用されることで解釈を可能にしている。これは一見、「その他」に含められる用法にみえるが、「会津はまるで伝説だ」「レオナルド・ダ・ヴィンチはまるで伝説だ」というコンピュータ文が可能な点からみて、メタファーの例と考えることが出来る<sup>(2)</sup>。最後に、今回あつかった書名

のなかには〈神々の物語〉という本来の意味での「神話」を下位カテゴリーにもつ例はみられなかった。

### 2.3. 「その他の用法」のみをもつくみあわせ

つぎに、N1 と N2 が本来的なタクソミーを形成せず、メタファーによる結合でもなくみあわせについてのべる。

#### 2.3.1. 「思想」

「思想」という名詞には、人名 (e.g. 岡本太郎)、地名 (e.g. 出雲、ヒロシマ)、作品名 (e.g. 春雨物語)、活動や行為 (e.g. 母語教育、自然保護、女性解放、服従、ケア)、政治的な姿勢や権利 (e.g. 戦争放棄、国家主権)、言語にまつわるもの (e.g. 国語、修辞) が N1 としてむすびつく。それ以外にも、「里、唯識、水俣病、昭和三十年、共用品、子ども、ロボット、重量拳」などがあげられ、ある領域において「思想」とみなされる様々なものが例として考えられる。N1 としてむすびつく名詞は、「ヒロシマ」という例からも推察されるように、当該の思想を象徴する要素が例示されていると考えられる。

#### 2.3.2. 「現象」

「現象」という名詞には、「私、宮沢賢治、顔、ラップ、オウム、女性の少年愛嗜好」といった名詞 (句) が N1 としてむすびつく。「ラップ」や「オウム」「女性の少年愛嗜好」は、ある時期に生じた事象の象徴的な事例として使用されていると考えられる。また、「私」「宮沢賢治」があがっているのは、『春と修羅』の冒頭の詩との関連であるが、哲学的な問題として「私」(にくわえて「顔」も) を現象の一種としてとらえなおす、といった意図が書名にこめられているものと考えられる。

#### 2.3.3. 「幻想」

「幻想」という名詞には「安全、家族、豊かさ、終身雇用、日中友好、構造改革、神」といった名詞が N1 としてむすびつく。これらは、社会においてア・プリオリに真であると認識されている対象を否定する視点をさしだす例と考えられる。この用法がメタファーなのかその他の用法なのか迷うところだが、「幻想を抱く」「幻想が覚める」といった「幻想」と典型的にむすびつく述語とこれらの名詞がむすびつけないことから (e.g. \*安全を抱く、\*神が覚める)、その他の用法としておく。

#### 2.3.4. 「他人」

「他人」という名詞には「自分、私、家族、夫、夫婦」といった名詞がN1としてむすびつく。「自分」や「私」などの本来「他人」ではない対象を「他人」に位置づけたり、「夫婦」や「夫」といった婚姻関係に関連する名詞がもつフレームの「他人」としての側面に注目させる用法である。

#### 2.4. 「通常表現」と「その他の用法」をもつくみあわせ

つぎに、「通常表現」と「その他の用法」をもつくみあわせについてのべる。

##### 2.4.1. 「問題」

まず、「通常表現」として「問題」という名詞の下位カテゴリーに位置する名詞には、「靖国、非正規公務員、戦後日本国家、皇国史観、言語変化、教育基本法改正」などがみられた。これらは、何らかの学問や政治、思想の領域において問題の具体例とみなされているものである。一方、「翻訳、石原慎太郎、自分、日本、日本思想、日常生活」といった例は、「トイウ」によって「問題」に結合することで臨時的に「問題」というカテゴリーの具体的な要素として位置づけられていると考えられる。この臨時的なカテゴリー化は当然、当該の下位にくる名詞が「問題」のカテゴリーに所属するための特徴をもっていなければならないが、その特徴の探索には当該の名詞がもつフレームや文脈のささえが必要である。また、その特徴はメタファーを生じさせる類似性にもとづくものとは考えにくい。このような、メタファー的な結合ではないが、単純なカテゴリーの包摂関係とも考えにくいものが「その他」の類型の特徴である。

##### 2.4.2. 「文化」

「文化」という名詞の下位カテゴリーに何が典型的に位置するかは、何を「文化」とみなすか、という社会的または個人的な認識のゆれがあろう。「文化」を後件にとって複合名詞をつくる、「遊牧、スポーツ、コーヒー、葬送、鉄道」などを通常表現に分類した。それ以外の、「留学、変態、動物、都、生物、数学、自然、殺陣、源氏物語、結核、教育、悪口」などは、ある学問領域においては文化とみなされうる対象で、「トイウ」による結合によってそれを明示する用法であると考えられる。

##### 2.4.3. 「生き方」

「生き方」という名詞の下位カテゴリーには「未婚、非正社員、お笑い芸人、職

人、女性アナウンサー、不登校、反権力、自給自足、イスラーム、ALS、摂食障害」といった名詞が「通常表現」として位置する。これらは〈職業〉や、〈生きるにあたっての姿勢〉〈信仰〉〈病名〉などをあらわす名詞である。一方、「その他の用法」である、「高倉健、ココ・シャネル、オノ・ヨーコ、オードリー・ヘップバーン、ステイブ・ジョブズ」などの人名、「イワンの馬鹿」「中国人」などの名詞は本来的には「生き方」という名詞がつくるカテゴリーの要素としては逸脱したニュアンスを感じるが、名詞にひもづいている本人たちの人生や物語のストーリーがひきだされることによって、「生き方」の模範例や想定しうる事例として解釈できる。また「中川政七商店」「地方」も同様の例であるが、これらの例は模範例ではなく、読者にとって耳慣れない事例を新規に「生き方」の一種として位置づける用法と考えられる。

## 2.5. 「通常表現」と「メタファー」をもつくみあわせ

つぎに、「通常表現」と「メタファー」をもつくみあわせについてのべる。

### 2.5.1. 「商品」

「商品」という名詞の下位カテゴリーには、「通常表現」として「電力、観光、マンション」、「メタファー」として「感動」「私」が位置する。ただし、通常表現としてあげた例も、「商品」の典型というよりは、普段はあまり「商品」とみなされない事物を「商品」として位置づけるニュアンスがあり、通常表現とメタファーの境界のあいまいさをしめす例といえるだろう（表1ではこの境界を点線でしめた）。一方、「感動」や「私」という例は、書名の名づけ親や話し手などの認知主体が、「感動」や「私」になんらかの商品価値をみいだしたときに「商品」の下位カテゴリーとしてこれらを位置づけるメタファーの用法と考えられる。

### 2.5.2. 「場所」

「場所」という名詞の下位カテゴリーには、通常表現として「教室、住宅」が、メタファーとして「彼女、中原中也、心、詩」が位置する。通常表現の例は、「教室」や「住宅」を「場所」として一般化し、その素材としてさしだす用法であると考えられる。一方、メタファーの例は、本来場所とはみなされない対象を〈何かが集まる空間〉として解釈する例と考えられる。



## 2.6. 「メタファー」と「その他の用法」をもつくみあわせ

つぎに、「メタファー」と「その他の用法」をもつくみあわせについてのべる。

### 2.6.1. 「人生」

「人生」という名詞については、「人生」が N1 としてむすびつく例 (e.g. 人生という旅) がメタファーの例として典型的であると考えられるが、N2 に位置する例もみられる。この名詞には「私小説、鳥倉千代子、私、社長、イーグルス、性同一性障害」といった名詞が N1 としてむすびつく。これらの例のうち、「私小説」は私小説と人生がもつフレームの類似性からみてメタファーの例と考えられる<sup>(3)</sup>。一方、「鳥倉千代子、イーグルス、私」は、指示対象がもつ人生の内実が解釈において間接的にひきだされることによって、象徴的な人生の事例として使用されることを可能にしている。また、「社長、性同一性障害」は、ある人物の人生を象徴する役職や障害の事例として使用されている。

## 2.7. 「通常表現」と「メタファー」、「その他の用法」をもつくみあわせ

最後に「通常表現」と「メタファー」、「その他の用法」のすべてをもつくみあわせについてのべる。

### 2.7.1. 「病」

「病」という名詞の下位カテゴリーには「双曲2型障害、きずな喪失症候群」といった病名が通常表現として位置するものと、「編集者、近代、義務教育、学校」のように、メタファーによって病の一種に位置づけられるものがある。さらに、「正常さ」という例は、相反する意味をもつ「病」にむすびつけられることで、別の観点から当該の名詞の意味をといなおすニュアンスが生じている。

### 2.7.2. 「時代」

「時代」という名詞の下位には「現代、世紀末、戦前、戦後、20世紀、昭和、大正、明治、江戸」といった名詞が位置する。一方、「今、明日」といった名詞は本来、〈時点〉をあらわすもので〈時間的区分〉をあらわす「時代」の下位カテゴリーには位置づけられないが、〈時間性〉という共通点をもとに「トイウ」をつかって「時代」に(強引に)結合しているメタファーの例と考えられる。また「その他の用法」と考えられる、「中田英寿、黒澤明、欽明、コイズミ、インド、ガロ、

エイズ」などの名詞は、ある時代を象徴するような人名、地名、書名、病名として使用されている。

### 3. 分析方法

以上、[表1]で整理した内容についてN2にくる名詞を手がかりに概観した。ここからは、「N1 トイウ N2」型の名詞句表現の性質をあきらかにするために、この形式と並行的な関係にあるコピュラ文についてメンタル・スペース理論の観点から整理する。

#### 3.1. メンタル・スペース理論からみた、名詞の関数的な側面の整理

メンタル・スペース理論では、名詞がつくる内包をもったカテゴリーを役割とよび、役割の要素を値とよぶ(井元 2006)。名詞の指示は、役割が構成する関数(=役割関数)によってつぎのように規定される。

(2)  $R(M) = v$  [R:役割、M:スペース、v:値]

このとき、スペース(=M)は役割関数のパラメーターとして、値を限定するはたらきをもつ。具体的には、場所や時間や信念などの情報である。たとえば、名詞「大統領」は国名と年数をスペースとして代入することで、特定の大統領を値として出力できる。

(3) a. 大統領(アメリカ、2015年) = バラク・オバマ

b. 大統領(フランス、2012年) = ニコラ・サルコジ

さらに、メンタル・スペース理論では語用論的関数(=コネクター)によるアクセス原理を導入し、異なるスペースやカテゴリーに位置する値(や役割)を関連づけて解釈することを可能にする。

(4) 二つの要素 a と b がコネクター  $F$  によってリンクされていれば ( $b=F(a)$ )、要素 b はその対応物 a の名前か、記述か指差しかにより同定できる。

(Fauconnier 1985を邦訳)

例えば、「この絵では青い目の少女は緑色の目をしている」という文は、「この絵では」という表現がスペース導入表現となり、現実スペースと絵画スペースというふたつのスペースが設定される。現実スペースに存在する「青い目の少女」の値と絵画スペースに存在する「緑色の目の少女」の値が、同一性のコネクターでむすばれることによって妥当な解釈が導出される。ほかに、「かつ丼がぐいにげした」のような換喩の例は、「飲食店スペース」のような限定された状況をあらわすスペースにおかれた「かつ丼」というカテゴリーと潜在的に存在する「かつ丼を注文した

客」というカテゴリーが換喩コネクターでむすばれることによって、一方の属性で他方を指示することが可能となる。なお、語用論的関数は  $F(a) = b$  という単純な式で表現されるが、役割関数と区別するためには、 $F(v_a, M) = v_b$  や、 $F(R_a, M) = R_b(M)$  という表示も可能であろう。前者は、値間に生じるコネクターを表示するものである。後者は、役割間に生じるコネクターを表示するもので、「語用論的関数  $F$  が、役割  $R_a$  とスペースを引数として、 $R_b(M)$  の値を限定する」ことをしめしている。

### 3.2. メンタル・スペース理論からみた、コピュラ文の整理

コピュラ文 (i.e. N1 は N2 だ) は言語そのものについて言及するメタ的な構文であると考えられる。そのありかたをメンタル・スペース理論の観点から整理すると、日本語のコピュラ文は次のように分類できる (コピュラ文の分類名を [ ] 内にしめす)。

- (5) a. 「 $v$  は  $R$  だ」 (e.g. 太郎は学生だ) → N1 を N2 がつくる集合  $R$  (= 値を欠いた役割) の値  $v$  としてわりあてる。 [ $vR$  コピュラ文]<sup>(4)</sup>
- b. 「 $R$  は  $v$  だ」 (e.g. 学生は太郎だ) → N1 がつくる集合  $R$  (= 値を欠いた役割) に N2 を値  $v$  としてわりあてる。 [ $Rv$  コピュラ文]
- c. 「 $v$  は  $v$  だ」 (e.g. ジキル博士はハイド氏だ) → N1 の値と N2 の値が同一であることをしめす。 [ $vv$  コピュラ文]
- d. 「 $R$  は  $R$  だ」 (e.g. 「花子は男の子を育てている」の意味で) 花子は男の子だ) → 状況や文脈の支えをうけて、N1 の役割と N2 の役割から連想される知識が互いに関連づけられていることをしめす (ただし、それぞれの役割は値をもつ<sup>(5)</sup>)。 [ $RR$  コピュラ文]

これらのうち、 $vR$  コピュラ文と  $Rv$  コピュラ文は役割関数で導出される関係をメタ的に表示したものと考えられ、 $vv$  コピュラ文と  $RR$  コピュラ文は語用論的関数によって導出される関係をメタ的に表示したものと考えられる。

#### 役割関数

- (6) 学生 ( $M$ ) = 太郎 [  $M$ : 太郎が学生であることを述べる状況 ]

#### 語用論的関数

- (7) a.  $F_{\text{同一性}}$  の語用論的関数 (ジキル博士,  $M$ ) = ハイド氏 [  $M$ : 「ジキル博士とハイド氏」の作品世界 ]
- b.  $F_{\text{関連づけ}}$  の語用論的関数 (花子,  $M$ ) = 男の子 [  $M$ : 花子とその息子を関連づけるような状況 ]

### 3.3. 「N1 トイウ N2」とコピュラ文との対応関係

vr コピュラ文は「N1 トイウ N2」形式と並行的な関係にある。

(8) 太郎は学生だ → 太郎という学生 (太郎<学生)

Rv コピュラ文は論理的に「N1 トイウ N2 形式」と並行的な関係にない。

(9) 学生は太郎だ → \*学生という太郎

vv コピュラ文は N1 と N2 をトイウで結合することができない。これは、vv コピュラ文が値と値を語用論的関数でむすびつけるため、主題名詞と述語名詞がタクソミーの関係にないことによる。

(10) ジキル博士はハイド氏だ → \*ジキル博士というハイド氏

また、RR コピュラ文も N1 と N2 をトイウで結合できない。これは、RR コピュラ文が語用論的関数によって問題となる役割と役割を関連づけるもので、主題名詞と述語名詞がタクソミーの関係にはないことによる。

(11) 花子は男の子だ → \*花子という男の子

ただし、メタファーの基盤となる類似性にもとづく語用論的関数によるマッピングは、本来的には主題名詞と述語名詞が包摂関係にないはずであるのに、N1 トイウ N2 (e.g. 人生という旅) という形式をゆるす点が奇妙である。これは、語用論的関数に隣接性にもとづくものと、類似性にもとづくものがあると仮定したばあい、隣接性にもとづくマッピングが、あるカテゴリーとカテゴリーが語用論的に「関連づけられている」ことを示すだけでタクソミーは形成せず、関連づけの条件も外的(社会的、心理的)に与えられるものであって、問題となるカテゴリーの双方には、対応する属性がないのに対し、類似性にもとづくマッピングは、隠喩スペース(のようなものが仮定されるばあい)において、周辺的な属性さえ合致すれば、本質的な属性(=カテゴリー属性)が異なっても、問題となる対象が当該のカテゴリーの成員であることを話し手が認めるといことが推察される。

## 4. 分析

2節におけるデータの観察からトイウの機能を整理すると、「N1 トイウ N2」形式には、おおきくわけてふたつの機能があることがわかる。ひとつは「一般化」であり、もうひとつは「再カテゴリー化」である。通常表現におけるトイウの機能は前者で、メタファーやその他の用法は後者に該当する。

#### 4.1. 一般化

通常表現におけるトイウの機能は、ある名詞とその上位カテゴリーに位置する名詞をトイウによって結合することで、その名詞を一般化して談話に導入するものである。これは「聞き手が未知であると話し手が信じる事物」を話題としてとりあげるときにしばしば使用される。

- (12) a. ロサリア・デ・カストロという詩人を知っていますか。
- b. ワーカーズ・コレクティブという働き方を知っていますか。

この用法は、メンタル・スペース理論における役割関数の範疇に属する用法で、vR コピュラ文と並行的な関係にある。

- (13) a. ロサリア・デ・カストロという詩人 → ロサリア・デ・カストロは詩人だ
- b. ワーカーズ・コレクティブという働きかた → ワーカーズ・コレクティブは働き方だ。

#### 4.2. 再カテゴリー化

つぎに、メタファーやその他の用法は、「再カテゴリー化」という機能をもつと考える。再カテゴリー化の用法は、本来、N1 と N2 のあいだに生じるタクソノミーの関係をしめすトイウが、タクソノミーの関係にない N1 と N2 をもタクソノミーの係にとりこむものと考えられる。ただし、そのとりこみかたは、メタファーとその他の用法とで相違がみられる。

まず、メタファーは再カテゴリー化にあたって類似性にもとづいて、本来タクソノミーの関係にないカテゴリーどうしをトイウで結合する用法である。

- (14) a. キリスト教という宗教 [通常表現] ↔ キリスト教という神話 [メタファー]
- b. 近代という時代 [通常表現] ↔ 近代という病 [メタファー]

このメタファーの用法も vR コピュラ文にパラフレーズすることができる。

- (15) a. キリスト教という神話 → キリスト教は神話だ
- b. 近代という病 → 近代は病だ

これは、3.3節でも指摘したように、N1 が N2 があらかずカテゴリーの内包に合致するなんらかの類似点をそなえているときに、N1 を N2 のカテゴリーの要素とみなす、「行為」としての側面をメタファーがもっているからと考えられる（多門 2014を参照）。すなわち、N1 トイウ N2 形式のメタファー用法は、きっかけは類

似性にもとづく語用論的マッピングであっても、帰着するコピュラ文の位置づけは vR コピュラ文になる。これは Lakoff and Johnson (1980) にも指摘があるが、現実世界では偽になるような vR コピュラ文が比喩的な認識のもとでは真になることを意味する。

一方、通常表現でもなくメタファーでもないトイウの用法を「その他の用法」としてひとくりにしたが、その内実については精査する必要がある。この用法で典型的なくみあわせとして、固有名詞と抽象的な意味をあらわす普通名詞をトイウで結合するものがある。

- (16) a. ヒロシマという思想
- b. 石原慎太郎という問題
- c. ココ・シャネルという生き方
- d. 島倉千代子という人生
- e. 黒澤明という時代

この用法においても、N1 と N2 は本来的にはタクソノミーの関係にはない。したがって、この用法もメタファーの用法とおなじく、本来タクソノミーの関係にない N1 と N2 をトイウで結合することによって語用論的な関係をタクソノミーの關係にとりこんでいるものと考えられる。しかし、メタファーの用法がコピュラ文へのパラフレーズにおいて vR コピュラ文の拡張的な用法であったのに対し、その他の用法は vR コピュラ文としての解釈は難しい。

- (17) a. ?ヒロシマは思想だ
- b. ?石原慎太郎は問題だ
- c. ?ココ・シャネルは生き方だ
- d. ?島倉千代子は人生だ
- e. ?黒澤明は時代だ

また、N1 と N2 を語用論的に関連づける vv コピュラ文や RR コピュラ文であればそもそもトイウによって N1 と N2 が結合できないので、この用法は特異な用法であるように思われる。すなわち、「その他の用法」は対応するコピュラ文をもたない、N1 と N2 をトイウで結合した環境においてのみ、妥当な解釈が成立する用法と考えられるのである。では、この用法がどのような原理で生じているかであるが、これには固有名詞の指示対象がもつ百科事典的な知識がかかわっている。固有名詞はメンタル・スペース的には、「単一の値を要素としてもち、いかなるスペースにおかれてもその値を指示する役割」とみなされる。上記の N1 は人名や地名で、本来的には当該の N2 の下位の要素としては位置づけられない。しかし、それぞれ

の固有名詞の指示対象がもつ百科事典的な知識の一側面が、トイウによる N2 との結合をきっかけとして活性化されることで N1 が N2 があらわすカテゴリーの象徴的な要素として位置づけられるものと考えられる。この用法は、典型的には、固有名詞と抽象的な意味をあらわす普通名詞がトイウで結合されたばあいには顕著に生じるものだが、N1 が普通名詞であっても同じメカニズムがはたらくことがある。

- (18) a. {子ども、共用品、重量拳} という思想
- b. {翻訳、日常生活} という問題
- c. 地方という生き方
- d. {性同一性障害、社長} という生き方
- e. エイズという時代

固有名詞のばあいと同様に、コピュラ文にパラフレーズしたときの容認度は、トイウを使用するばあいと比較して、ひくい。

- (19) a. ?{子ども、共用品、重量拳} は思想だ
- b. ?{翻訳、日常生活} は問題だ
- c. ?地方は生き方だ
- d. ??{性同一性障害、社長} は生き方だ
- e. ?エイズは時代だ

また、「私」や「自分」などの代名詞がこの用法の N1 として使用されることがある。本来的には代名詞は内包的な意味が希薄な品詞であるが、これらの代名詞がもつフレームの一側面が N2 の内包がもつ特徴に合致したときに、この用法が可能になるものと考えられる。

- (20) a. 私という {現象、人生}
- b. 自分という問題

これらの例もコピュラ文にしたときの容認度がトイウを使用するばあいと比較してひくい。

- (21) a. ?私は {現象、人生} だ
- b. ?自分は問題だ

ところで、「私」や「自分」という名詞は、トイウによって「他人」という名詞と結合することがある。これも、再カテゴリー化の一種で、相反する意味をもったカテゴリーどうしをむすびつけて、全体としてあたらしい認識を読者にうながすオクシモロン（対義結合）をトイウ形式で表示している例と考えられる。

- (22) {私、自分} という他人

この例も、「私」や「自分」という代名詞がもつフレームのなかから〈客観視〉や

〈第三者的な視点〉といった側面を連想することによって、解釈が可能になるものと考えられる。この例に関しては、コンピュータ文にパラフレーズしても違和感をおぼえない。これは、典型的な修辞技法の一種であるオクシモロンの関係にあることが、表現としての一般性を底あげし、容認度をあげているのかもしれない。

㉓ (私、自分) は他人だ

以上、「N1 トイウ N2」の機能に一般化と再カテゴリー化があり、通常表現が前者に、メタファーとその他の用法が後者に位置づけられることを、コンピュータ文へのパラフレーズを手がかりに分析した。

## 5. おわりに

本稿ではつぎのことをのべた。

㉔ a. 「N1 トイウ N2」形式はタクソノミーをしめす用法だけでなく、比喩的に拡張した用法 (= トイウの比喩的な用法) もになう。前者の機能は「一般化」であり、後者の機能は「再カテゴリー化」である。

b. 再カテゴリー化の用法にはメタファーの用法とその他の用法がある。前者は、本来、N1 と N2 のあいだに生じるタクソノミーの関係をしめすトイウが、類似性にもとづく N1 と N2 の語用論なマッピングをもタクソノミーの関係にとりこむものである。後者は、N1 がもつフレームのなかから N2 があらわすカテゴリーの内包に合致する側面がトイウとの結合をきっかけとして想起されることによって生じるものである

分析にあたっては、メンタル・スペース理論の観点から日本語のコンピュータ文の整理をこころみたが、紙幅の都合で大づかみな整理となっている。稿をあらためて、より精緻な規定が必要であると考え。また、本稿ではあえて明示しなかったが、コンピュータ文がメタ的に表現するものと換喩との関連や、トイウの機能と換喩との関連についても、検討する必要があると考える。

[表1]

N 2	通常表現	メタファー	その他
もの	科学、政治家、人間、私、男、女、夫、母親、家族、理想、責任、幸せ、文学、人生、信仰、日本、組織、法	φ	φ
人	イエス、日蓮、漱石、太宰治、近松門左衛門、市川房	φ	φ



	枝		
謎	量子、自閉症、進化、神、私、自己、身体、真理、社会、貨幣、資本主義、教育、コミュニケーション、遊び、日本人、インド	φ	φ
民	φ	JAL、母親の役割、幸福、ドル崩壊、豊かさ	φ
神話	φ	母性本能、統一理論、男らしさ、国際連合、合理的市場、学歴社会、家族、キリスト教、輪廻／遺伝子／会津、レコード・ジャケット、レオナルド・ダ・ヴィンチ、スターリン	φ
思想	φ	φ	岡本太郎、出雲、ヒロシマ、春雨物語、母語教育、自然保護、女性解放、戦争放棄、国家主権、服従、対話、ケア、国語、修辞、里、唯識、水俣病、昭和三十年、共用品、子ども、ロボット、重量拳
現象	φ	φ	私、宮沢賢治、顔、ラップ、オウム、女性の少年愛嗜好
幻想	φ	φ	安全、家族、豊かさ、終身雇用、日中友好、構造改革、神
他人	φ	φ	自分、私、家族、夫、夫婦
問題	靖国、非正規公務員、戦後日本国家、皇国史観、言語変化、教育基本法改正	φ	翻訳、石原慎太郎、自分、日本、日本思想、日常生活
文化	遊牧、スポーツ、コピー、葬送、鉄道	φ	留学、恋愛、動物、都、生物、数学、自然、殺陣、源氏物語、結核、教育、悪口
生き方	未婚、非正社員、お笑い芸人、職人、女性アナウンサー、不登校、反権力、自給自足、イスラーム、ALS、摂食障害	φ	高倉健、ココ・シャネル、オノ・ヨーコ、オードリー・ヘップバーン、ステイブ・ジョブズ、イワンの馬鹿、中国人、中川政七商店、地方
商品	電力、観光、マンション	感動、私	φ
場所	教室、住宅	彼女、中原中也、心、詩	φ

人生	φ	私小説	島倉千代子、私、社長、イーグルス、性同一性障害
病	双曲2型障害、きずな喪失症候群	編集者、近代、義務教育、学校	正常さ
時代	現代、世紀末、戦前、戦後、20世紀、昭和、大正、明治、江戸	今、明日	中田英寿、黒澤明、欽明、コイズミ、インド、ガロ、エイズ

#### 注

- (1) CiNii Books (<http://ci.nii.ac.jp/books>) は国立情報学研究所が提供する全国の大学図書館が所蔵する図書や雑誌などの情報を検索できるサービスである。
- (2) より正確には、N1 と N2 が直接メタファーによって結合するのではなく、N1 のフレームがもつ側面の想起をへてメタファーによる結合が生じる、2段階の解釈プロセスをもつ比喩的な用法と考えられる。
- (3) データ収集時には CiNii Books に登録されていなかった、『印刷という革命』（白水社、2015年）という書名もこのパターンに該当すると考えられる。
- (4) vR コピュラ文に似たコピュラ文として、N1 の一時的な状態を N2 があらわすものがある (e.g. 太郎は病気だ)。この種の文は N1 と N2 がタクソノミーを構成しない。形容詞文と名詞述語文の間に位置する文と考えられ、vR コピュラ文とは区別する。
- (5) RR コピュラ文は、N1 と N2 がそれぞれ値を持った役割であると考えられる。一方で、vR コピュラ文や Rv コピュラ文の R は値を欠いた役割のみの名詞である (井元1995を参照)。これは例えば、vR コピュラ文を拡張した「太郎は学生だが、この学生は勉強もスポーツもよくできる」における「この学生」が値をもつ主題名詞の「太郎」しかさせないのに対し、RR コピュラ文を拡張した「(正子が育てているのが女の子であるのに対して、) 花子は男の子だが、この子はやんちゃでなかなか言うことをきかない」における「この子」が述語名詞の「男の子」をさしており、述語名詞も値をもっていることをしめしている。これは、本来、RR コピュラ文が「花子は男の子を育てている」といった文に由来することによって考えられる。この文における「男の子を」は指示的な位置であり、名詞は値をもつ。

#### 参考文献

- 井元秀剛 (1995)：「役割・値概念による名詞句の統一的解釈の試み」『言語文化研究』21, 97-117. 大阪大学大学院言語文化研究科。
- (2006)：「コピュラ文をめぐる名詞句の意味論と語用論」『シュンボシオン 高岡幸一教授退職記念論文集』13-22, 朝日出版社。
- 金水 敏 (1986)：「名詞の指示について」『築島裕博士還暦記念国語学論文集』, 467-90, 明治書院。
- (1990)：「役割」についての覚書」『ことばの饗宴—笈壽雄教授還暦記念論集』, 351-61, くろしお出版。
- 坂原 茂 (1990)：「役割, ガ・ハ, ウナギ文」『認知科学の発展』3, 29-66, 講談社。
- 佐藤信夫 (1978)：「レトリック感覚—ことばは新しい視点をひらく—」, 講談社。

- 田窪行則 (1989) : 「名詞句のモダリティ」『日本語のモダリティ』, 211-33, くろしお出版.
- 多門靖容 (2014) : 『比喩論』, 風間書房.
- 西山佑司 (2003) : 『日本語名詞句の意味論と語用論』, ひつじ書房.
- 丹羽哲也 (1993) : 「引用を表す連体複合辞『トイウ』」『人文研究』45巻第1分冊, 大阪市立大学文学部.
- 三上 章 (1953) : 『現代語法序説』, 刀江書院.
- Croft, W. (2002) : The role of domains in the interpretation of metaphors and metonymies.  
In Dirven, R. and R. Pörings (eds.), *Metaphor and Metonymy in Comparison and Contrast*, Berlin/New York: Mouton de Gruyter, 161-205.
- Fauconnier, G. (1985) : *Mental Spaces*, Cambridge University Press.
- (1997) : *Mappings in Thought and Language*, Cambridge University Press.
- Lakoff, G. (1987) : *Women, Fire and Dangerous Things What Categories Reveal about the Mind*, University of Chicago Press, Chicago and London.
- Lakoff, G. and M. Johnson (1980) : *Metaphors We Live By*, University of Chicago Press, Chicago and London.

(おおたがき・さとし 近畿大学講師)